

この時期のハンブルクは青空が広がっていることが多く、また程よい暖かさなのでとても過ごしやすい気候です。ただ思いもよらなかったことは、ハンブルクではこの時期に花粉が飛び始めるので、花粉症の人にとっては少し辛くなるということです。日本ほどではないですが、花粉症の私はやはり目が痒くなるので日本から持ってきた薬で対応しています。

さて今月は映画祭や日本祭りなど、日本に関するイベントがいくつも開かれていました。そこに参加してみて、日本が海外にどのような影響を与えているのか肌で感じることができ、同時に日本にいる時とは違った視点から自国の文化・価値観を見つめる機会を得ることもできました。今月はイベントの様子と共に、「海外から見た日本」について私が考えたことをお伝えしたいと思います。

Japan Tag（日本の日）

ドイツでは年に一度、ハンブルクとデュッセルドルフで「Japan Tag（日本の日）」と言われるイベントがあります。今年ハンブルクでは大学近くの日本庭園にて、さまざまな催し物や屋台が開かれました。そのなかでもひと際注目を集めていたのは合気道や柔道、弓道などの演武です。道着をまとった人々が技を披露する姿に、観客たちの目は釘づけでした。ドイツへ伝わった武道は、このようにして広まっていくのだな、というのを目の当たりにしたような気がしました。またハンブルクのある中心にあるアルスター湖では、毎年花火や太鼓の演奏も行われているようで、日本がハンブルクに与えた影響の強さを感じます。



自国にいてはあまり特別なものとして日本文化を認識することはないですが、異国の地では際立って見え、そのたびに私は日本の文化を再認識させられます。そしてハンブルクでこれほどに注目されている日本文化への誇らしさを感じたのと同時に、日本においてよりも海外の方が武道や伝統芸能への注目度が高いのではないかと、と少し寂しくも感じました。

Japan Film Fest（日本映画祭）に参加して

今期に日本語サポーターとして参加している授業のなかに「字幕翻訳」の授業があります。その翻訳をした映画は「Japan Film Fest（日本映画祭）」で上映される日本の映画だったので、日本語からドイツ語への翻訳でした。翻訳をするとドイツ語の文が長くなってしまふことが多く、それを規定の尺におさめるためにドイツの学生は試行錯誤していました。また日本語特有の表現である敬語や、漢字の同音



異義語を用いた言葉遊びをドイツ語でどのように訳すべきか、といった点も苦労していました。

映画公開当日は、映画館へ行き作品の出来栄を自分達目で確かめることができました。映画の最中は、ずっとお客さんの反応が気になっていました。映画中は思わぬところで笑いが聞こえたり、期待していたところでの反応が薄かったりして、実際どのくらい映画の内容が伝わったのかは図りえませんでした。ほぼ全員がエンドロールまで見てくれたことから、私たちの努力が認められたような気がしました。



今回の字幕翻訳を通して、日本語の内容をドイツ語で表現することの難しさを目の当たりにし、同時に面白さも感じることができました。

『不思議なクニの憲法』の鑑賞を通して

2016年に日本で公開されたこのドキュメンタリー映画が今月、ドイツ4つの都市で上映されました。ハンブルクでは私の通う大学で上映される上に、監督とのトークの時間もあるということで興味湧き、観に行くことにしました。この映画では、普段メディアにあまり取り上げられることのないような、フリーターや主婦の方が、政治に対する自らの思いを声に出している姿が描かれていました。その描写に込められているのは、「憲法は難しくて遠い存在ではなく、自分の生活を保障するために存在しているものであり、したがって『自分の生活を見直すことが、政治へ意識を向けるきっかけになる』」というメッセージだと感じました。

トークの時間で、日本とドイツの政治的関心の差が話題になりました。日本では「若者の政治離れ」という言葉をよく耳にしますし、政治的無関心は高まる傾向にあります。それに比べてドイツは多くの若者が政治への関心があり、それは60%以上という投票率の高さからも伺えます。

ドイツでは日本でいう中学3年生にあたる学年から、「人々が学校の内外で政治について自ら考え、行動する能力」を身に付けることを目標とし政治教育がなされています。その成果もあり、若者にとって政治は身近な存在で、自分たちの意見を主張し行動することは当然、といった認識がされているように思います。あるドイツ人学生は政治参加することに対して「自分の生きている社会が、自分の意に反する方向に向かってしまうのが嫌だから。」と言っていました。日本の若者も、その思いは同じだと思います。ただ、その思いを実現するために「自ら考え、それを行動に起こすこと」が足りないのだと差が出ているのだ、と考えさせられました。